

2024年度(令和6年度)「重点研究」成果発表会：アートとケアが会う視点と拠点づくり
ワークショップ「人とつながり、アート&ケアに会う」の可能性

正保正恵・渋谷清・池田明子・古山典子・山内加奈子・宮前良平・大谷悠

本研究の目的は、市内の子育て世代包括支援センター（日本版ネウボラ）と連携しながら大学独自の拠点を作ることをめざして、アートを通した安心・安全を感じる学びをプログラム化し、個人や社会にもたらす変化を評価していく足がかりを作ることである。また、新しいタイプの大学発の子育て・親育て拠点の在り方を問う。

今回の実践の下敷きにしたのは、Geoffrey Crossick, Patrycja Kaszynska (2022)である。

自転車発電で電気をつくろう（大谷）：参加者がオリジナルのランプシェードを作り、その後参加者自身が自転発電を動かし、ランプを灯した。こだわりのデザインとストーリーをもったランプを作ることで自らの世界観を表現する。

音楽づくりを気軽に楽しもう（古山）：本活動は、集団から個の音楽経験へと展開しつつ、多様なイメージが可能な「雨」をテーマとして、図形楽譜を用いながら無作為に鳴る音に自分の音を合わせる形で創作に取り組む。

絵本の世界を愉しもう（池田）：絵本の世界にゆったりと浸ってみることで、あるいは参加者の皆さんと語り合うことで、自分の感じ方を大切にしたらいいんだなということを感じ何気ない日常を心豊かに過ごすことの大切さに気付く。

背守刺繍で想いを伝えよう（正保）：背守刺繍とは、江戸時代から伝わる背中に（縫い）目を作ることで「魔物」から子どもの命を守るための「おまじない」。不安の時代を生きる現代においても、刺繍を通して安心を感じる。

何気ない日常を想起しよう（宮前）：日常記憶地図ノート（サトウアヤコ）を用いて、普段思い出すことのない何気ない日常の想起を通じて、参加者自身の生きてきた記憶の地層が掘り返す。また、それぞれの語りを聞きあうことが集合的なケアの場を作る。

「絵でコミュニケーションしよう」（山内）：描画行為は、自身でコントロールできない部分をもち無意識が投影される側面がある。そのため、自分が気付かなかった状態を知り、自己理解や洞察の契機となる。

「みんなで楽しむ造形遊び」（渋谷）：色画用紙などの材料を使い、床一面に広がる大きな木を創り出した。みんなで材料を切ったり、並べたり、つなげたり、重ねたりする活動を通じ、徐々に巨大な木が出来ていく喜びを共有する。

参加者の感想からは、「個人の内省」、「アイデンティティ」、「主観的幸福感」などの項目についてプラスの評価がなされ、さらに大学を拠点に自分たちが研究をしながら新たなワークショップを作っていきたいという創発がなされた。

参考文献

Geoffrey Crossick, Patrycja Kaszynska (2022) 『芸術文化の価値とは何か—個人や社会にもたらす変化とその評価』水曜社